

無量寿なるいのち
2019年11月28日に行われ
ました真宗本廟「報恩
講」池田勇諦氏にお話
いただいた講演の内容
の抄録です。

それを親鸞聖人にお聞きすれば、私たちはいつもそれを聞かされておるのでした。最も身近には『正信偈』。最初、「帰命無量寿如来」、無量寿如来に帰命すると。これは「無量寿なるいのち」に目覚めて生きよ、ということでしょう。死んだらしまいといういのちではなくて、無量寿なるいのちに目覚めて生きよと。私たちは、いのちというと、この肉体に閉じ込められたいのちしか知らないうです。ところが今、無量寿なるいのちということは、この肉体の縛りから、束縛から解放された真実なるいのちなんです。無量寿なるいのちを今、多くを申し上げておれませんが、無量寿なるいのちとは、もう一つ言葉を出せば、「無我なるいのち」です。我、無しと。この「我、無し」という「無」は、存在の無

ではありません。何もなという事ではありませんが、所有の無です。今日の私というのには、自我意識でしよう。自我意識を自分として生きているのが、今日の私。その自我意識で考えているように、無我と云いますと、直ちに、無我になるとか、なれないとか、そういう話になってしまふ。「なかなか無我にはなれませんのでね」、なんて精神論にしてしまふわけですが、そうではなくて、本来、存在論ですからね。無我であることに気づく。それだけですね。無我であることに目覚める。そのことはいちいち申すこともございませぬが、この存在の根本である「生老病死」ということを見ても、これは皆さん方がいつもお聞きのように、「生まれ、老いる、病む、死ぬ」、どれを取ってみても、自我の私の考えの支配下にはないでしよう。私たちは、生まれた限り必ず老いる。なぜ老いるのですか。他力だからです。「因縁他力」だから

です。自我意識の自力（思い）が間に合うのならば、私たちはいつまででも若いでしょう。老化することはないでしょう。なぜ私たちは病気になるのか、病むのか。「因縁他力」だからです。私の考えを超えた因縁果の法則によって運ばれておりますから、因縁が整ったことは必ず現れてきます。因縁が整わない限りは、いくら望んでも遇うことはできません。だから、出てきたことはしつかりと受けとめる。これ以外に道が開ける方法はないです。そういう意味で私たちの存在は、「法身」で、法のはたらきそのもの、法則そのものの活動態であります。その意味で、現前のこの一呼吸が、まったく法則の、はたらきそのものの、一呼吸です。ここを『末燈鈔』には「自然のよう」（『真宗聖典』六〇二頁）、自然必然のありさまとあります。それゆえ「みだ仏は、自然のようをしらせんりよ（料）なり」（同前）。これ「仏力他力」です。まさに「因縁他力」と「仏力他力」の一体の活

動態としてある、この存在のもついわれではありませんか。しかし自我のわれの生きざまは、そうかぎりなくこの存在を私物化して「ままにならぬ」と愚痴ることしか知らぬありさまです。この自我のわれを、ごまかしなく照らし出す「仏力他力」への帰依に成り立つ「一切の有碍にさわりなし」（『真宗聖典』四七九頁）の救いではありませんか。そうした気づきに立つ時、先に亡くなった方がどこへ逝かれたかということも覚えてくるでしょう。だから、ご住職にお尋ねなされば、必ずそのことを聞かせてくださるに違いない。自分の逝くところ、方向がはっきりすれば、先に亡くなった方の逝かれたところも分かる。そうですよね。本当に、この終活という、今日の大きな問題は、繰り返すようですが、私たちに「あなたはどうなのを生きているのか」と、最も大切な一点が問い掛けられてきています。出来事なんです。この問いが、本当に自分自身、明らかにならなければ、

ば、生きたことにならないのでは無いでしょうか。蓮如上人はおっしゃっていますね。「たのむべきは弥陀如来なり」「まいるべきは安養の浄土なり」と（『真宗聖典』七七二頁）。「たのむべきは弥陀如来なり」、これは投げどころ。「まいるべきは安養の浄土なり」、これは方向です。投げどころと方向が明らかになる。そのことが終活ということから私たちが問われているのではないですか。「おまえ、それがはっきりしたか」ということです。その意味で終活は人生の店じまいをすることではなく、却って店開き、自分の最も大切な問題に取り組みことです。遅くはありません。気づいた時が出發です。報恩講に遇わせていただきましたことにおいて、あらためてこれをよくよくわが身自身に聞き聞かせていただかなければならない、聞き聞かせていただきたいと願わずにいられません。



念仏

もう十年も昔のことになりました。秋の陽のほれた午後のことでした。私は一人の親友とともに、ある若き母君の同伴をして、その母君の稚きお子のご遺骨を火葬場からお迎えもうして、そのお宅に帰ってきました。ご内仏様のお側にお骨箱を安んじ香華をたむけたとき涙が流れました。その母君と母君のご老母君とは、はげしくいつまでもお泣きになりました。その座には私どもの他に一人の僧がおくやみに来ておられました。その方は断えずお念仏を称えておられました。突然この二人に向かつてこう申されました。「泣くがいい、泣きたいだけ泣いていなさい、泣けばいくらか悲しみの遣り場もあるよ。泣くよりほかに悲しみをはらすこともよきなからう、お泣き、心ゆくまでお泣きなさい。けれど、あなたの方の涙はじき乾いてしまふ、もうじきに泣けなくなってしまうぞ、薄情だけれどな。それで、それを見抜いてくださる親様のお涙は乾くときが

ないのだ、いつまでも私たちのために泣いてくださるのだ。だからその親様の涙を想うてな。お念仏もうしなさいや。せいぜいお念仏もうすのだ、泣きたかったらお念仏もうす、泣けなくなったらやはりお念仏もうす、お念仏もうしなさいや。そんなにしてお念仏もうすのは自力の念仏だからいけない、などと理窟をいうのじゃないぞ。自力の念仏だといわれても何でもよらしい、ただ念仏もうさせて参らせてくださる親様のお涙なのだから、そのままでお念仏もうすのだ。それがいつの間にか他力のお念仏であるとしられてくるから。お念仏もうしなさい、凡夫の涙は、はかないから親様の涙に帰らせていただくばかりでな。「南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏」僧はこう言ってお念仏を高らかに称えておられました。そのときお座敷の床の間に蓮如上人御筆の正信偈の句が揚げられてありました。

如来所以興出世
唯説弥陀本願海

迦牟尼仏がこの娑婆世界にお生まれくださったのには何の目的であるかとなれば、他の目的なのではない、ただ、阿弥陀如来のご本願をお説きくださるうとの思し召しであらせられた。それなら私たちがこの世に生まれたのは何の目的であるのか。これがわからなければ生きたかいたがらないぞ。それは、「唯説」ではなくて「唯聴弥陀本願海」なのだ、ただ阿弥陀様のご本願を聴くためだ、ご本願をお聴かせにあげかるためだ。この一事がはつきりしていないと、その他のこと一切だめだぞ。あなた方が学問をしようとして、たわごとにならざるやうに、み止まってしまうぞ。

唯聴弥陀本願海
「歎異抄」にも「煩惱熾盛の凡夫・火宅無常の世界は、よろずのこと、みなもて、そらごと、たわごと、まことあることなきに、ただ念仏のみぞまことにておわします」という言葉がある。

念仏させてお浄土に参らせてくださるやうというご本願をお聴きするのだ。お念仏もうしなさいや。「南無阿弥陀仏」

友と私とは涙しながらお念仏もうしました。そのときから十年も過ぎているでしょう。その間に友も逝きました、その若かりし母君も逝かれました、そしてその僧も逝かれました。病弱にしていつ逝くかわからない身がこうして今も生を保ち、そのかみのこと、その僧から耳に聞き伝えられている聖語をこう記しておきます。

南無阿弥陀仏
南無阿弥陀仏

白井 成允
（しらいしげのぶ）

広島大学教授
（昭和四八年八月二五日没）

浄土真宗名法話講話
選集第二十二巻

白井先生聞法録より

歎異抄の会（お誘い）

ています。歎異抄を通して自己と向き合う会を月に一度、開いています。本当の自分、生れたこと、目的は、歳だけは容赦なく取っていくのにこれだけのいのだらうか。昨日八回開きましたがその内、二回田畑先生（佐藤病院院長、龍谷大学大学院教授）に講話して頂きました。これもコロナのお蔭です。自分がわからなくて、この世に生まれ、生きた甲斐がありましようか。

参加自由、無料、
場所…大分市中津留二丁目
デイサービス よくなる
大分商業高校となり
時…毎月第3土曜日
13:00~15:00
問い合わせ 渡辺
電話 090-2508-5651

